小泉信三賞

選択課題1　一〇〇年後の世界を生きる

『全性愛論』
～自由恋愛と異性愛規範を見つめ直して～

福田有佳（ふくだあやか）
（東京都／私立広尾学園高等学校一年）

はじめに

「何故、世の中のマジョリティを占めているのが異性愛者なのか」一般論に寄り添って考えると、疑いようもない「本能だから」という答えが見つかるだろう。だが、本当にそれは本能なのか。私はその時いかんせん憤慨していたので、それを否定する何かを見つけようと、或いは導き出そうとした。そしてこんな過程を経て生まれたのが、この「全性愛論」である。議論は、そもそも本当に大多数を占めているのがヘテロセクシュアル（異性愛者）なのかというところから始まる。或いは、世の中のマジョリティは自身が異性愛者である事に違和を感じた事があるのだろうか。いや、寧ろ無いからこそのマジョリティなのかもしれないが、私はそのマジョリティが一種の社会洗脳によって自覚のチャンスを奪われているのではないかと危惧している。端的に言えば、現代人は「ヘテロセクシュアルである」という事を無自覚に誘導されているのではないか、という事だ。当然ながら、読んでいるあなたは甚だ暴論だと思うかもしれない。ここで質問だ。あなたは同性の先輩もしくは先生に、憧れの念を抱いた事や心惹かれるような経験をした事があるだろうか。或いは、推しという存在でも構わない。次元は問わない事としよう。では、仮にその感情が、恋愛感情によるものだったとしたら？　あなたはまだ疑うかもしれない、同性を相手にそんな事は有り得ない、と。ところが、ここで一つの可能性が生じる。「社会が異性愛を規範とする為に、あなたは恋愛感情を憧れと錯覚している」どうだろうか。私が個人的に一〇〇名を対象にとったアンケート（注1）では、約八五％がその可能性に賛同できる、或いは可能性の存在を考えられる、と回答した。今回は、昨今多様性文化を賑わせるＬＧＢＴＱを軸に据えて、潜在的パンセクシュアル（全性愛）から人間的な愛についてまで幅広く論じていきたいと思う。そして一〇〇年後の世界を生きる性的マイノリティの人々が少しでも自然体になれる愛を育む事に貢献できたのならば本望である。

愛について

愛を論じる上で、まずはじめにその定義を行わなくてはならない。ここで質問だが、男女の友情は果たして成立するのだろうか。これに対し同性愛者同士の男女なら互いの性対象でないので成立するという回答が時折見られるが、全く以て愚答である（何故愚答なのかは後に説明するので、今は取り敢えず続きをお読み頂きたい）。

まず、多面性のある愛の中でもその種類と性質に視点をおいて定義付けて行くが、

そもそも我々は何種類の愛のベクトルを持っているのだろうか。古代ギリシャの見立てに基づくと、愛は三種類存在する（正確には四種類だが、残りの一つは宗教的なものなので一旦放念しよう）。第一にエロス、いわゆる一般的な男女間の愛情であり、性欲に誘起される肉体的なものである。第二にフィリア、これは信頼や連帯感などを生む友愛を意味する。第三にストルゲー、これは血縁に基づいた家族愛を示す。この三つが、現代でも広く知れ渡る愛の種類である。では、この三種の愛をベクトル的に表すとどうなるか、それを示したのが図1である。

この図は愛情が二種類のベクトルを持ち、更に片方は再度枝分かれする事を示している。潜在的家族愛は友愛から発展するものではないのに対し、後天的家族愛（友愛）や性愛は、はじめ緩やかな友愛から発展するものである（補足として、ストルゲー・フィリアとエロスを互いに混同し出す人が出てくると危惧する人もいるが、近親間でのエロス感情は一層倫理的にシビアな問題なのでここでは一旦放置しよう）。そして、フィリア・エロス間の矢印は、互いが作用し合う物だという事を示している。

そもそも、この三種類の愛情の決定的違いは脳科学的な部分にあると言える。愛情を科学的性質で分けると、ドーパミン的愛情とオキシトシン的愛情の二つに分けることができる。前者は所謂情熱的で高揚感を感じる性愛的なもので、求めるような愛だが、長く続かず数年程度で冷めやすい。対して後者は友愛や慈愛的で安心感や信頼をもたらし、永続的に満たされる愛情の事である。そして、理化学研究所、ロンドン大学、大阪市立大学の共同研究（注2）によると、恋人の写真を見た時の気持ちの高まりとドーパミン神経の活性化には正の相関が見られる事が明らかになっている。加えて、東邦大学医学部名誉教授で脳生理学者である有田秀穂先生の論文（注3）では、友人や家族との団欒やスキンシップからは、オキシトシンが分泌されストレスが解消される事が分かっている。つまりストルゲーとフィリアはオキシトシン、エロスはドーパミンを基とする感情である。以上のような事実からは、愛の種類は脳科学的に分類されるものであり、決して性別が基準となっている訳ではない事が理解できる。

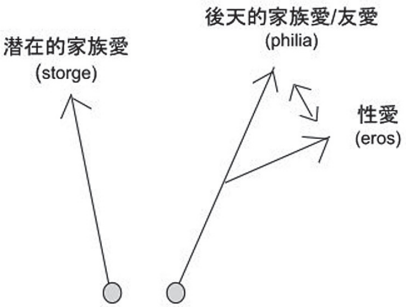

図 1

ここで一度、はじめの男女の友情は成立するかという問いに戻ると、そもそも友情と性愛は相互に作用し合う関係で、性別によって明確に区分されるものではないので、そのような問い自体がはなからお門違いなのではないか、という結論に達する。よって、冒頭に述べた恋愛対象云々といった答えも、恋愛対象と友愛対象が完全に分離している訳ではなく、環境によって変わり得る同じ原点から生まれるものである故、愚答なのである。

本能と学習

前に愛の種類と性質について定義をした

が、次は「どこまでが愛なのか」という事に関しての定義付けをする。まずは図2をご覧頂くと分かる通り、本能が司る領域はあくまで内在的性欲である。つまり、その後、個々が何を性欲を刺激する引き金とするかはあくまで性癖に過ぎないという事だ。ヘテロセクシュアルも然り、バイセクシュアルも然り、世の中には常人が理解し得ない稀有な性癖を持ち合わせる人もごまんといるだろう。結論から先に言ってしまえば、異性愛も同性愛もただの性癖に過ぎないのである。

一度人間から離れて、他種に目を向けてみよう。鳥類や哺乳類など集団生活を行っている動物には、異性愛、同性愛、両性愛、無性愛の四つのセクシュアリティが存在する。無論、各生物によって知能の高さには差があるので、一概にそれが「愛」によるものであると確言するのには多少無理がある。だが、これらの性的指向の存在は、少なくとも内在的性欲の矛先が必ずしも異性に向く訳ではないという事の証明にはなるだろう。

ここで一つ鍵となるのが、どこからを愛とするか、である。無論人間以外の動物にも愛なる感情があるのは明快だが、その源

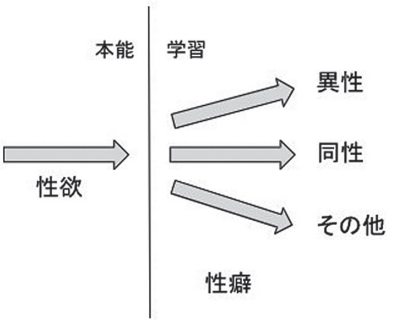

図2

はあくまで種族保存本能に過ぎない。それは繁栄の為であったり、子供を守るためであったりするもので、言ってみれば感情によって引き起こされたり、何か自覚を伴うものではない。その反面人間は本能による愛を認識し、献身的な行動を行ったり、逆にエゴイズムを纏わせたりする。つまりここでの違いは感情の認知があるかどうかと言えよう。さしあたって種族保存的愛情と人間的愛情と表現できる。

では何故、生殖を行えない同性愛や無性愛が存在するのか。理由として、そもそも全ての動物が子孫を残すために性行為を行っている訳ではない。例としてすぐあげられるのが、人類と最も近い動物と言われるボノボである。DNAの塩基配列を比較すると、人間とボノボはDNAの約九九%が一致している。岩波書店『科学』内の「ボノボの社会と認知研究」によると（注4）、ボノボの多くはバイセクシュアルで、彼らの性行動を調べると凡そ八〇%は子孫繁栄に役立たないものである事が分かっている。例えばボノボのメスは通常、ある程度成長すると親元を離れ新しい群れコミュニティに参入するが、その際に群れ内で権力を握るメスと「ホカホカ」と呼ばれる、メス同士が抱き合い性交渉を行う。

ボノボのみならず、同性愛は実に約一五〇〇種の生物で観察されているのには読者も吃驚するのではなかろうか。ベルン自然史博物館で開催した展示会、「Queer-Diversity is in our nature」では、様々な動物の性指向の多様性が紹介された。例えば、高い知能を保有する哺乳類であるバンドウイルカの多くは、バイセクシュアルであり、中には同性のイルカと長期的な関係性を築く個体も存在する。更にはゾウやライオンでも同性愛的な行動が見受けられ

る。展示会でキュレーターを務めたベルン大学の生物学者であるクリスチャン・クロプフ氏は、社会性のある脊髄動物の殆どに同性愛が存在すると語った。これら千差万別な動物の例も踏まえて考えると、性欲の矛先を何に向けるか、或いは人間にとって愛のターゲットがどこへ向かうのかというのは、あくまで後天的な学習によるものというのは理にかなっているのではなかろうか。

一〇〇年前の世界を生きる

では、再度人間に視点を戻し同性愛の歴史を辿ろう。史上最古の同性愛関係の記録は、紀元前二五世紀頃、エジプト第五王朝時代に建てられた二人の男性同士の墓だと言われている。また、紀元前二七年、ローマ帝国で行われたアウグストゥスの治世で同性結婚が初めて記録されている。紀元前以前、同性愛はあらゆる古代文明の中でいわば性癖のようなものとして受け入れられてきた。しかしそれは、紀元前後を境に一変する。原因となったのは、言うまでもなくキリスト教の誕生である。キリスト教の布教につれてホモフォビアとよばれる同性愛に対する差別や偏見が始まり、同性愛婚を禁止する法令が皇帝により発布された。つまりこれがヘテロノーマティビティ（異性愛規範）の確立であり、対象者が極刑を科される法制度も次第に制定されるようになった。一方キリスト教文化のない日本では、同性愛を悪とする文化が芽生えるのは比較的遅く、著名な戦国武将ら、織田信長や徳川家康等は男色と呼ばれる同性愛を当たり前としていた。驚くべき事に男色の歴史は実に深く、最古の記述は七二〇年の『日本書紀』まで遡り、そこには二人の神主が「善友」と呼ばれる性行為を含む親友だと記されている。また、キリスト教にかわって当時日本で主勢力であった仏教では異性同性にかかわらずあらゆる性行為が禁止されていたが、仏教では比較的異性との性行為を嫌う性質の方が強かった為、次第に男色を許容する文化が発展した。そのような文化が広く浸透する中で、かの有名な宣教師フランシスコ・ザビエルは、男色の罪を日本人に説く難解さを本国への手紙で嘆いたという。当時の日本では、僧侶が男色を好んだ為庶民にも当然の事として受け入れられていたのである。江戸時代になると男娼による売春行為が始まった。しかし、転機は欧米諸国と同様、やはりキリスト教の布教によるものだった。明治維新と共に西欧文化が取り入れられると、日本国内でも男色が徐々にタブー視されるようになる。大正時代には遂に、男色含む同性愛は「病気」として捉えられるまでになった。

このように同性愛の足跡を辿ると、人類が文明を持ってから現代までの間で同性愛が異常視、或いはマイノリティとして孤立を深めたのはかなり最近であるのは判然たる事ではなかろうか。人類史上で見ると、同性愛はある種性癖でしかなく、それ以上でもそれ以下でもない。日本では寧ろ好まれるような文化もかつて存在したにもかかわらず、宗教的弾圧によって忌まれるようになったのは一目瞭然と言えよう。そしてこれはまさに洗脳的支配と言えるのではないだろうか。

最後に、後にも触れるが、異性愛までを本能が司っている事を否定する決定打として同性愛の存在というものが挙げられる。先程、歴史を遡れば人間の性的指向として古くから同性愛は極めて「普通」なものとして受け入れられた事は瞭然だと述べた。そもそも異性愛を絶対的な本能だとすれば、同性愛指向はダーウィンの進化論に則って、既に淘汰されているはずなのである。

生物として同性愛を好むという事実は、言うまでもなく生存弱者である事を意味している。故に、同性愛を好む個体は退潮すると考えるのが極めて合理的だが、実際はそうではない。現在ＬＧＢＴを自認している人は人口の一〇％存在する。自認していない潜在的な個体数も含めるならばその数は更に増えるだろう。要するに、動物にとって性欲の矛先を何に向けるか、或いは人間にとって愛のターゲットがどこへ向かうのかというのは、あくまで後天的な学習によるものというのは理にかなっているのではなかろうか。

潜在的パンセクシュアルの可能性

以上を踏まえ、私は人間は潜在的にパンセクシュアル（全性愛）であるポテンシャルを少なからず持ち合わせているのではないかという疑念を抱いた。

異性を愛する事、男が女を、女が男を愛する事は果たして本能なのか。前述の通り、本能の管轄下にあるのは性欲でしかない。では、何故異性愛がマジョリティを占めるのか。答えは単純明快である。異性愛はある種の確固たる社会システムに過ぎず、それが強固過ぎるあまり、人間が恣意的に本能と錯覚しているのである。つまり、性欲を刺激し呼び起こす対象が、社会システムによって築き上げられた固定概念、「異性」だと言う事だ。この社会システムは一種の集団洗脳、蓋し偏見であろう。しかし、この偏見は先人や大人によって故意的に次世代へ植え付けられるものでも、学校で教養として教わるものでもない。寧ろ、大人が恋愛や性に囚われ、束縛され、いわば檻に閉じ込められている。故にマジョリティの目にはそれは抑圧や洗脳としては映されず、異性愛は社会モラルではなく本能として、脳を錯覚させる。それだけでなく、種族保存体系によって恋愛先進者による優越感がもたらされ、各人間で互いに作用し合う。恋愛を経験した者、性を経験した者、結婚という永続契約を交わした者は、無自覚にそれらに対し優越感を抱く。そして優越感に恍惚しながら、まるで自らが秀でているかのように恋愛経験や性経験を権力として振りかざすようになる。ある種不文律として、恋愛強者＞恋愛弱者という方程式が機能するのだ。恋愛というフィールドにおいて遅れをとった者は、血縁のある親だけでなく周囲の友人からもマウンティングを取られ、焦燥感を抱え、その「権力」にひれ伏す事となる。恋愛が義務として、強制として、当然だという顔をしながら迫ってくるのである。これを正当化したものが、結婚制度だ。自由恋愛であるはずの物を、国家という強力なコミュニティが半永続的な契りとして、枠に押し込める。言うなれば、人間社会には恋愛が義務的に課されているのであって、それに従わない者は、社会不適合者等として排除される。そもそも、恋愛をするか否かなど、個人の自由な欲望に過ぎず、潜在的社会権力が自由に手を加えるべきものでないのは明らかである。しかし、仮に人類の大多数が恋愛を選ばない、もしくは同性愛を育む事となれば、滅亡などあっという間だろう。恋愛を選ばなければ、快感を求める以外の理由で性行為を行う事は無くなり、快感を求める性行為には繁殖要素は必要ない。性行為が生殖ではなく、完全に娯楽として働くようになれば、人類の滅亡も大した時間はかかるまい。だからこそ、信者が教祖の教えを鵜呑みにするように、世間のマジョリティもまた異性に恋愛感情を抱く事を当然の事と錯覚している。それがあくまで積日の社会的営みによって築き上げられた虚像に過ぎないとしても、その事実に気付く事なく、恋

愛を自己の欲望と捉えている。その反例として、今しがた述べた同性愛の存在や他種の同性間性交が挙げられるだろう。また歴史も、いつの時代も同性愛が存在していた事を明白に説明している。だから私は、異性愛は本能ではなく社会システムによる集団洗脳であると断言するのだ。

さて、ここまでを踏まえると異性愛がシステムに過ぎないという事に多少なりとも納得して頂けたのではなかろうか。それを前提として、人間は生来全性愛のポテンシャルを全員が持っているのではないかという説を提案したい。ここで一旦、パンセクシュアルがどのような性質なのかを説明しよう。パンセクシュアルとは全性愛を意味する。しばしばバイセクシュアル（両性愛）と混同されがちだが、両者の違いは男女の二性のみが恋愛対象なのか、それとも全性が対象なのかというところにある。そして、全性愛は、「好きになった人が好き」という考え方を基盤としている。更に言えば、この観念こそが本来の自由恋愛の根幹であり、同時に言をまたない共通認識でなければならないと私は強く思う。先に述べたように、人にとっての性欲の矛先というのは、あくまで後天的学習によるものに過ぎない。故に全員が、性愛の対象として潜在的にパンセクシュアルである可能性を持ち合わせているのではなかろうか。そして、生後の様々な「制限」、宗教や道徳、一般論などが重なり合う事で、各々の性的指向が限定されていくのである。更には、性的マイノリティである事の自覚というのも、「解放」によるものである。それは同性からの告白であったり、或いは日常間の些細な違和であるかもしれない。その繰り返しの中で、異性愛者によるマジョリティが構成され、全性愛者、または同性愛者、或いは唯一無二の性愛観念を持つ人がマイノリティとして生まれる。つまり、性的指向というのは固定的なものではなく、環境や人間関係によって変化し続ける流動的なものなのである。しかし社会は流動的な性質のものを、強引に型にはめる事に努め、また人々にそれを強要した。それが今、元来存在していた多様性をマイノリティとして顕在化させ、ＬＧＢＴＱ＋と名付け、社会システムの枠組みに押し込もうとしている。その事実こそが、リアルタイムで多様性を否定し、自由であったはずの恋愛を束縛しているのである。

一〇〇年後の世界を生きる

私が描く未来像。大前提として、同性愛が完全に肯定される時代は訪れない。単純に人類が滅亡の危機に瀕すからだ。しかし、人を増やさなくて良くなる頃、例えば現代から近未来にかけては、同性愛への批判が減り認められていく。或いは、自分がその一員である事を自覚する人が増えるだろう。人を増やさなくてはならなかった故の洗脳が次第に解け、潜在的パンセクシュアルを認知する人が自然と増加する。いわば近未来に待っているのは、ヘテロノーマティビティの否定ではなかろうか。改めて私が一〇〇年後の世界に望むもの、それは自由恋愛の再解放と性的マイノリティの観念的滅絶である。性別に囚われない恋愛をする事が当たり前となり、それが原因で葛藤する人が居なくなる世界。ＬＧＢＴＱのマイノリティ性が否定され、各々が唯一無二の個人として自己を確立し、互いを肯う事の出来る世界。性愛が文化的に構築されてきた事を自覚し、その規範性が性別にかかわらず相対化された「生きやすい」世界が築かれていて欲しい。そんな世界を、一〇〇年後の人々が生きられたらと、心からそ

う思う。

参考文献

〈注〉

（注1）同校の生徒である中高生を対象に、SNSを利用して行ったアンケート。異性愛が本能ではなく、そう錯覚する程の確固たる社会システム、或いは集団的洗脳であるという可能性に関して、可能性に賛同できると答えた人が二三%、可能性があるとは思うと答えた人が六〇%、到底有り得ないと思うと答えた人が一八%という結果となった。

（注2）理化学研究所・ロンドン大学・大阪市立大学、"Imaging the passionate stage of romantic love by dopamine dynamics"、二〇一五年、https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC4391262/

（注3）有田秀穂、"Activation of Brain Oxytocin by Social Attachment and Grooming Behaviors Induce Stress Reduction through Inhibition of HPA Axis"、東邦大学、二〇一五年、https://www.jstage.jst.go.jp/article/isiis/33/1/33_KJ00009847729/_article

（注4）平田聡、「連載ちびっこチンパンジーと仲間たち第一五三回『ボノボの社会と認知研究』」、岩波書店『科学』、二〇一四年九月号